

あの蝶は、僕を置いて

ヒト

登場人物

男

女

迷子

お巡りさん

本編

男と女がいる。

男はキラキラした目で、女は思いつめた目で、立っているか、座っているかする。
女の胸には、蝶のブローチ。

どうやらここは屋外で、今は夜のようだ。

男 アサギマダラって蝶がいるんだよ。

女 うん。

男 遠く遠く、海を渡っていく蝶なんだ。

女 そう。

男 もちろん知ってるよね？

女 え？

男 え、知らない？ 前も話したと思うけど。

女 あー、そういえば聞いたかも。

男 しっかりしてよ、もう。

女 ごめんごめん。

男 それじゃもう一回、頭から説明するね。アサギマダラは、

女 大丈夫大丈夫！

男 本当に？

女 うん、多分日記に書いてあるから、寝る前に、そう、寝る前に確認するから、その蝶の話は置いといて。

男 どこにさ。

女 話の置き所くらい自分で考えてよ。

男 それじゃあここに。よし！

女 そこに置くんた。

男 それで話ってなに？

女 え？

男 え？

女 あ、ああ話ね、そうだね、あたしから言ったんだもんね。

男 そうだよ、うっかりさんめ。

女 初めて言われたよ、うっかりさん、って。

男 そう？ よかったね、初めての言葉に触れて。

女 そうだね、あたしはうっかりさんだ、本当に、そう。

男 で、そのうっかりさんは、なにをうっかりしたんだい？

女 まあ、そのさ。

男 うん。

女 あたし達もう、二十八になるよね？

男 ああ、そうだね。正確には、来月の八日に君が二十八になる。そしたら僕らはおそろい、二十八と二十八のカップルだ、へへ。

女 いや、まあそうなんだけど、今は正確さは重要じゃないの。

男 正確さよりも大切なものがあるかな？

女 あると思うよ。って、また脱線しようとする！

男 ああごめんごめん。なんか癖でさ、人の話の腰を折っちゃうんだよね。ボキリ！ つて。

女 悪い癖だよ、滅茶苦茶悪い癖。

男 無意識で、つい、ね。

女 なおたちが悪い。

男 でもその分、仕事は丁寧にするんだ。人一倍丁寧に丁寧に。ひたすら、パンの生地を無心にこねるように。

女 今の仕事は？

男 カウンセラー。

女 やめたほうがいいって！ 絶対！

男 天職だと思うんだけどな。

女 むしろあんたを雇い続けてる病院の気が知れない。

男 でも院長先生には期待、いや、評価されてるんだよ？ 君は本当におしゃべりだね、

患者さんよりもずっと、って。

女 それを褒められてると思うの？

男 思うもなにも褒められてるんだって。この間だって、君はこんなところで燻ってるよ
うな人間じゃない！ 知り合いの病院に行かないかい？ 話は通しておくから、だから、ね？ ね！ なんて凄いい剣幕で言われちゃってさ、はは。まあ、今の病院居心地いいから断ったけどね。

女 可哀そうな院長先生。

男 あ、蝶だ！

女 え？

蝶は飛んでいない。

女 いないけど。

男 いないよ。

女 え？

男 え？

女 え？

男 嘘です。

女 え？

男 嘘だよ、はは。だいたい蝶は、夜には飛びません。

女 なんで嘘ついたの？

男 抜き打ちテストさ。僕の話をちゃんと覚えているかな、ってね。

女 あのだ。

男 残念！ 赤点だ。これから開く補講に、ちゃんと参加するように！ 家、寄ってくで
しょ？ そこでみつちりと話すよ。幸い明日はお互い休みだし、朝まで話しても問題

は、

女 そういうところが！

男の声 あのお！

迷子、慌ててやってくる。

男・女 え？

迷子 ご存じありませんか？

男 なにを？

迷子 私のこと、ご存じありませんか？

女 知りません。

迷子 それでは、ここに私が落ちてはいませんでしたか？

女 ええ？

迷子 それか、この空を私が飛んでいたりはしませんでしたか？

男 あなたに翼があるようには見えないから、空を飛ぶのはちよつと難しいんじゃないかな。

迷子 そうですね、確かに。では、空を飛んで逃げた可能性は低いかな。

女 ちよつとちよつと。

男 なに？

迷子 ああ、失礼しました。驚かせてしまったようです。

男 確かに驚きました、はは。

迷子 そりゃあ驚きますよね、こんな夜更けに突然、見ず知らずの男に話しかけられたら。女性だったらまたちよつと違う反応が返ってきたのかもしれませんが、どうやら私は身も心も男のようでした。こればかりはどうも。

女 いや、女の人だったとしても。

迷子 ああ、でもどうか、その驚きと恐れを他所へうつちやつて、助けてくれませんか、私を！

女 ええ、いやえつと。

男 なにかあつたんですか？

女 ちよつと！

迷子 聞いて下さい！ 私はどうやら記憶喪失のようなんです。

男・女 記憶喪失？

迷子 ええ、そうなんです。

男 記憶喪失の人が、自分のことを記憶喪失なんて言いますかね？

迷子 だって実際そうなんですもん。

女 ああ、そこをまっすぐ行ったら交番がありますから、そつちで、ね？

迷子 いや、そうなんですよ！ お巡りさんに聞けばいい、私も最初はそう思っていたんですが、なんだか足がその、うまく前に進まないと言うか。交番と逆のほうにはキビキビ動くんですけどね、不思議なことに。

女 へ、へえそうなんですなあ。あなさ。

男 なに？

女 多分相当不味いことになりそうだから、うまく追い払ってよ。

男 あなただっか行ってください。

女 ストレートに言うな！

迷子 なんでそんな残酷なこと言うんですか！ あなた達はあれですか、雨の中、猫なのに濡れネズミになった震える捨て猫に、そっと傘をさしてやるくらいの優しさも持ち合わせていないんですか！

男 僕猫嫌いなんです。それじゃ。

女 あ、うん。

迷子 待つて待つて待つて待つて！

男 なんですか？

迷子 分かりました、例えが悪かったんですね？ だからあなた達は冷たいんですよね？
だったら謝ります、ごめんなさい。どうか助けて下さい、本当に困ってるんです。

男 いや、でも彼女が。

女 え？

迷子 なんですか？

男 追い払ってって、

女 助けましょう！

男 え？

迷子 本当ですか？

女 ええ助けますとも、助けようじゃありませんか！

迷子 やったあ！

男 いいの？

女 （男を叩く）

男 いたっ。なにになになに？

女 それで、どこから忘れてるんですか？

迷子 はい、最初からです！

女 あ、具体的に。

迷子 ですから、最初からですよ。

男 生まれた時から？

迷子 そうかもしれません。現に今、私は自分の両親の顔も、両親から貰ったであろう、自分の名前のことも思い出せません。

男 でも親から教えて貰ったであろう日本語は話せてますよね？

迷子 あ、確かに。

男 よかったですね。言葉も忘れちゃってたら、もっと大変なことになってたと思いますよ。言葉が通じない人間に対して世間は冷たいですから。

迷子 ああ、よかった。一安心。

男・迷子 ははははは。

女 よ、よかったよかった。で、問題はひとつ解決ですね？

迷子 いや、実際の問題はなにも解決してませんよ。ただ現状の確認が出来ただけで。

女 でも、ふたつとまでは言いませんが、ひとつくらいは解決しましたね？

迷子 まあ、そうですね。ちよつとした安心は手に入ったかも。

女 ならよかった！ 頑張って下さいね、これからも。

迷子 え？

女 それじゃ失礼します。ほら！

男 え？

迷子 ちよつとちよつとちよつとちよつと！

女 あたし達に出来ることは全部やりました、最善を尽くしました、だからもうあとは公務員の管轄です、具体的に言えばお巡りさん。

迷子 それが怖いからあなた達に助けて貰いたいですよ！

女 ああもう！ お巡りさんが怖いってことは、なにか後ろ暗いことがあるんですよ！

そんな人の面倒なんて、……あ。

迷子 ……。

女 えっと、その。

迷子 私は、やっぱり罪深い人間なんでしょうか。こんなに、お巡りさんを怖がるなんて、やっぱりおかしい気が、

男 太郎！

女・迷子 え？

男 名前を忘れたんでしょ？ それなら代わりの名前があった方がいい。で、どうでしょう、太郎さん？

迷子 太郎って、私が？

男 そうそう。

迷子 う、うーん。

男 いやですか？

迷子 いや、悪いってことはないんですけど、もっとう、個性的な名前がいいかなあ、って。

女 仮の名前なんだから、そこはあんまりこだわらなくていいんじゃない。

迷子 いやでも、折角だから。それにほら！ もし私の本当の名前が太郎だったとしたら、気まずくありません？

女 誰に？

男 バタフライ！ 蝶って書いて、読みがバタフライ！ どうですか！

女・迷子 太郎で。

男 なんですか。カッコよくて綺麗で、夢がある名前でしょ？ ねえ？

女 そういうの後で苦労するから、つけられた方が。

男 そんなにいや？ 子供ができたら、この名前にしようって決めてたのに。

女 奥さんの意見をちゃんと聞いた方がいいね。

男 だから今聞いているんだけど。

女 え？

男 え？

迷子 あの。

男 はい？

迷子 私の名前が、太郎って決まったわけですけど、どうしましょう？

男 どうしようって？

迷子 なにかいい方法ありませんか？

男 なにかある？

女 え？ ああ、うん。持ち物の確認するとか？

男 なるほどそれだ。で、なにを持っていますか？

迷子 ちよっとお待ちを……、あ！

男 なにかありましたか？

迷子 ふふふふ、デン！（スマホを取り出す）

男・女 おおおおお！

男 これはもう、ほとんど解決ですね。その中にはあなたの個人情報の全てが詰まってる

でしょうから。

女 それは言い過ぎかもしれないけど、まあ手掛かりはありますね、きっと。

迷子 ふう、自分の強運が怖い！ 人間万事塞翁が馬、悪いことがあればいいことがある。世の中つてやつはよくできてるなあ。

男 ほら、確認しましょう！ ここまでくるとこつちもワクワクするなあ。ほら、一緒に

見ようよ、感動の瞬間を。

女 あたしは、いい。二人で見て。

男 そう？

迷子 さあさあ、なにが出るかな、なにが出るかな？

ワクワクの間からの、沈黙。

女 どうでした？

迷子 知ってますか？

男 知らないです。

迷子 知ってますか？

女 なにを？

迷子 パスワード。

女 知ってるわけないでしょ。

迷子 え、っと。

男 思い出せます？

迷子 もっと大切なことも思い出せないのに、スマホのパスワードなんて思い出せるわけないでしょ！

男 急に怒らないで下さいよ。

迷子 ああどうするんだ。開けなくちゃ、こんなのただの光るかまぼこ板だよ。

男 どうしましょうね。

女 太郎さん。

迷子 なんですか？

女 交番は、あっちにありますよね。

迷子 そう、みたいです。

女 なら、あっちじゃなく、そっちに、ひたすら歩いていたらどうですか？

迷子 え？

女 そしたらなにか思い出すかも。ほら、同じ場所を何度も歩き回ってたら、アイディアが出たり、忘れものを思い出したりするでしょ？ ね？

男 そうかな？

女 ほら！ 彼もそう言ってる！

迷子 は、はあ。

女 なにを隠そう彼は、この町に数多ある病院の中でも、一番大きなメンタルクリニックでカウンセラーを務めているのです！

迷子 おお！

男 数多って言っても一軒しかないけどね。

迷子 凄いですね！ 人は見かけによりませんね！

男 いやあ、照れちゃうなあ。

女 そんな彼の言うことに間違いがあるでしょうか？ いいえ！ ありません！

迷子 確かに！ お医者さんが嘘を言うはずない！

男 いや僕は医者じゃなくて、

女 でしょう？ だからここはひとつ、彼の言うことを信じて、そっちに、来たほうに歩いていきましょう。そうすれば見つかりますよ、太郎さんの記憶のカケラが！

迷子 はい！ それでは！

男 元気だなあ。

女 いってらっしゃい！

迷子 いってきます！

迷子、自分が来た方に走り去る。

男 別に走る必要のないのに、変なの。ね？ はは。

女 行こ。

男 え？

女 あの人が帰ってくる前に。

男 いやいや、意地悪しちゃ悪いよ。

女 ああね、あの人には赤の他人だよ。わざわざ待つ義理はないでしょ。

男 でも、あっちに行け、って言ったのは僕らでしょ？ あ、そっちに行け、か、はは。

まあそう言ったのは僕らなんだし、待ってあげようよ。

女 あのみ。

男 なに？

女 なんでここに呼んだと思う？

男 あの人を？

女 あんただよ！

男 どうしたの？

女 あんたをここに呼んだのはあたしだ！

男 そ、そうだね、うん。

女 だから、あたしがなんで、あんたをここに呼んだのか、その理由が分かんないのかって。

男 ええ、なんだろう。誕生日でもないし、二周年記念でもないし、なに？

女 ちよつとは自分でも考えてよ。あたし、馬鹿みたいじゃん。あんたはなにも考えてないのに、あたしだけ、自分の中がよく分かんないどこまでも付き纏う影みたいな気持ちに振り回されて、グルグル目え回して、そんなに頭良くないのに、色々考えてさ。ほんとあたし、馬鹿みたいじゃん。いや、馬鹿なんだけどさ、どこに出しても恥ずかしくない馬鹿なんだけどさ。馬鹿って分かってんのにそれ以上馬鹿だと思わせないでよ、傷つくんだよ、あたしだって人並みに。

男 馬鹿じゃないよ、君は馬鹿じゃない。

女 そんな言葉が聞きたい訳じゃないんだって。

男 でも君は馬鹿じゃないのに、自分のことを馬鹿だ馬鹿だって卑下して、心に針を刺して血を流してる。そんな君に僕は、カウンセラーとしても、君の恋人としても、馬鹿じゃないよ、としか言えない。

女 だからだよ！

男 君は馬鹿じゃない！

女 あんたはあたしを見もせずに、あたしの心だけを見た気になって、勝手にはしゃいでる。それがイラつく、ムカつくんだよ！

男 落ち着いてよ、言ってること無茶苦茶だよ？

女 無茶苦茶はあんたでしょ？ 彼女が、電話でもラインでもなく、直接会って話そう、って言うてるんだよ。デートでもなく、話すことだけを目的にして。

男 そうだね、うん。

女 なにかあると思うでしょ？ 思わないの？

男 いや、なにか大切な話があるのかな、とは思うけど。

女 そう、大切な話があるんだよ。そこは分かってくれるんだね、ありがとう。

男 でも君は匂わせるだけで、ちっとも本心をあかしてくれないじゃない。これじゃ分かるものも分かんないよ。

女 察して欲しい、っていうのはそんなにおかしなこと？

男 おかしいよ。どんな気持ちも、言葉や行動にしくちやほとんど伝わらない。雰囲気だけじゃ不十分だよ。

女 ああ、そう、そうなんだね。……、それなら言葉にするよ。

男 是非お願い。なんでも聞くからね。

女 ……、あたし、

迷子、凄い勢いと剣幕で帰ってくる。

迷子 ひい、ひい、ひいつ。

男 お帰りなさい。

迷子 ちょ、ちよつと匿って下さい。

男 太郎さん？

迷子 さ、さっき、自転車で走ってたんです。

男 誰が？

迷子 お巡りさんが！

男 ほお。最近のお巡りさんは仕事熱心だなあ。

迷子 だからなんとか、ここはしのぎたいんです。

男 それならそこら辺に。

迷子 は、はい。

男 あ！

迷子 な、なんです？

男 そこら辺に僕の話置いてるんで、気を付けて下さいね。

迷子 なんの話ですか？

男 蝶の話ですよ、そこに蝶の話を置いたんです。

迷子 そ、そうですか。じゃあ踏まないように気を付けますね。

男 はい。

迷子 それじゃあ。

自転車のベルが聞こえる。

迷子 私を売ったりしないで下さいね。(隠れる)

男 そんな冷たいことしませんよ。僕は手が冷たいから、心は温かいんです。ね？

女、男にビンタする。

男 え？

女 あんたの心は、冷たいよ。

声 痴話喧嘩中すいませーん。

お巡りさんが徒歩でやってくる。

お巡りさん ちょっとお話いいですか？

男 え、はあ、その。

お巡りさん どうしたんです？

男 ちよつと、びっくりしちゃって。

女 お巡りさん。

お巡りさん はい、なんですか？

女 察しの悪い男の罪は、誰がさばきますか？

男・お巡りさん は？

女 あたしはこいつを裁きの台にのせたいんです。

お巡りさん くうー、若いなあ。私にもそんな時があったよ。ああ、今でも思い出す、中

一一の秋。好きなあの子のリコーダーを。ぺろ舐めた、あの時の味。

男 よく警察になれましたね。

お巡りさん 勉強は出来たからね。

女 それで、どうなんですか。

お巡りさん 残念ながら、出来ません！ 誰もこの罪な男性を裁くことは出来ない。民事

不介入だし、なにより、人の恋路に首を突っ込んだら、馬に蹴られて死んじゃうから。
はははは。

女 ですよ、知ってました。

お巡りさん 大丈夫。失恋は、優しい時の流れが癒してくれますよ。

男 失恋したの？

女 誰が？

男 君。

女 ……。

男 なんてね。そんなことにはならないよ、僕は君が好きだから。蝶と同じくらい君が
大好きだ。あの空を飛ぶ宝石と同じくらい、君は軽やかで、繊細で、美しい。

お巡りさん かあー、よくそんな甘ったるいことが言えるね。酔ってんの？

男 僕下戸なんです。

お巡りさん あ、そうなの。残念だったね、君は人生の半分を損してる。

男 その半分を知ろうとしなければ、幸せなまま死ぬますね、はは。

お巡りさん この幸せ者め。

男・お巡りさん ははははは。

女 それでなんですか。

お巡りさん え？

女 あたし達、そんなに怪しく見えましたが？

お巡りさん いやいやそんなに。安心して下さい。君らはどこにでもいる、ありふれたカ

ップルだよ。そこにいちやもんつけるほど、私は野暮じゃない。

男 だったらなんで？

お巡りさん いや、最近物騒だね。この辺りで出たんだよ、あれが。

男 あれ？

お巡りさん そう、あれ。

男 お化けですか？

お巡りさん お化けだったらよかったねえ。お化けだったら手錠かけられないから、警察
としては仕事しなくてすむし、気が楽なだけで。ただ今回の相手は、手錠をかけられ
るやつなんだ。

男 露出狂とかですか？ 君はどう思う？

女 ……。

お巡りさん 外れ。もつと怖いやつ。

男 なんだろう、税務署かな。

お巡りさん 通り魔だよ。

男・女 え？

お巡りさん 通り魔だよ。もう三人殺して、五人に深い傷を負わせてる。

女 あれって、別の町だったんじゃない。

お巡りさん そう！ そうなんだよ。私もそう思ってた。どうせ他所の町でしょ？ こつちにや関係ないない、対岸の火事だ、あつはつは、って。でもどうやら、今は、この町に来てるらしい。きっと野良犬みたいに、グルグル唸りながら放浪してるんじゃないかって。あくまで噂だけだね。あー、畜生！ いつだって犯罪者はこっちの仕事を増やしやがる！ ま、それで飯食えてるんだけどさ、悩ましいねえ。

女 その話、本当ですか？

お巡りさん 言っただでしょ、あくまで噂だって。ただその噂に、小さいけど、根も葉もあるらしい。少なくともうちのお偉いさんは、それが限りなく事実に近い、噂だと信じてるみたい。

男 物騒ですねえ。

お巡りさん 君ねえ、ちよつとは驚いたり怯えたりしてよ、彼女を見習って。面白くないなあ。

男 いやあ、実感の伴わないニュースって、へー、としか言えなくありませんか？

お巡りさん まあ、確かにそうかも。

女 ああ、その通り魔の外見と違って分かります？

お巡りさん ん？

女 男なのか、女なのか、とか、でつかい、とか、ちっこい、とか。

お巡りさん さあ、どうだろう。とにかく怪しやつが通り魔なんじゃない？

女 警察がそんな適当でいいんですか！

お巡りさん しょうがないでしょ、なんにも分かってないんだから。あ、でもひとつだけ。多分男じゃないかな。

女 多分って。

男 なにか根拠とかあるんですか？

お巡りさん 私の勘だけどね。今回の通り魔、女性しか殺してないんだ。

女 え？

お巡りさん そういうことするのって、男だけじゃない？ って私は睨んでる。どうかな

私の推理。

男 不思議な説得力がありますね。

お巡りさん でしょ？ 毎日海外ドラマを欠かさず見てるから、こういう推理力が磨かれて
いるんだよなあ。見直した？

男 初対面に見直すもなにもないでしょ、ははは。

お巡りさん それもそっか、ははは。

男・お巡りさん ははははは。

女 なんです、笑ってられるの？

お巡りさん それじゃ、私はこちら辺で。お邪魔しました。

男 いえいえ。

お巡りさん 君、ちゃんと彼女を守ってあげるんだよ？ 私は君達を、テレビ画面ごしに

見るはめになるのはごめんだからね。

男 ええ、しつかり。

お巡りさん 君も。色々彼に思うところがあるみたいだけど、今日だけは我慢した方がいい。
い。じゃないと命が、

女 うるさい。

お巡りさん は、はい。ごめんなさい、調子乗ってました。それじゃここいらで。さよな
らあ。

男 さようなら。

お巡りさん、居心地が悪そうに去る。
チリンチリンという自転車のベルが鳴り、お巡りさんを乗せた自転車はどこかに走
っていく。

男 行きましたよ。

迷子 本当ですか？

男 もちろん。ね？

女 嘘です、まだいます、お巡りさん。

男 え？

迷子 ひえ！ 嘘つき！

男 嘘じゃありませんって。なんでそんな嘘つくのさ。

女 ねえ、あたしの言うことも分からない、場の空気も分からない、分かるのはせいぜい蝶のことと、付け焼刃の心理学。そんなあんたにはなにが分かるの？ なにが分かるのよ！

男 あ、そうか。さっきのお巡りさんの話が怖かったんだね。でも大丈夫！ 通り魔に会う可能性よりも、会わない可能性のほうがずっと高いから。それに怖いなら、僕が君のうちまで送っていくよ。それか、僕のうちに来る？ 全然問題ないから遠慮せずに、女 ねえ、教えてよ。

男 え？

女 あんたは何回あたしの手を握った？ あんたは何回あたしのことを抱きしめた？ あんたは何回あたしにキスをした？ あんたはあたしに、愛してるって一度でも言ってくれた？

男 言って欲しいの？ だったら、

女 いらない！ そんな養殖の愛してる！

男 えっと、な、泣いてるの？ なにが悲しいの？

女 泣いてない！

迷子 あのお。

男 ごめん、多分僕に原因があるんじゃないか、って薄々は感じるんだけど、どうしてそう感じるかまでは分からないんだ。だから、教えて欲しい。分かってみせるから。

迷子 ちょっとー。

女 あたしはただ、分かって欲しいの。あんたに。

男 分かるよ、言ってくれば必ず分かる。だから言葉にしてよ。

女 ……。

男 ど、どうして黙っちゃうのさ？ お願いだよ、ただ言葉にしてくれればいいんだ、端的に、率直に言ってくればなおいい。信じてよ。

女 あたしを信じてないあんたを、どうして信じなきゃいけないの？

迷子 あのですね。

男 信じてるよ！ どうしてそんな悲しいこと言うんだ。

女 それを悲しいとは感じるのね、ちょっと嬉しい。

男 話をそらさないでよ。

女 それでない。

男 え？

女 これっぽっちもそれでないの。

迷子 嘘つき！

男 え？

迷子 もういないじゃないか、なんでこんな意地悪するんだ！

男 いや今大事な話をしてて。

迷子 私の大事を差し置いてまでする大事な話なのか！

男 はい。

迷子 そうですか、それはお邪魔してすいません。でも、私にとっても今はとても大事な話なんです。センター試験前の受験生の追い込みのように、

男 今は共通テストって言うんですよ。

迷子 あ、そうなんだ。

男 あなたの年が分かってきた気がします。

迷子 本当ですか！

男 ええ、だからあなたの話は後にして、

迷子 ずるい！ 教えて下さいよ、ねえねえねえ。

男 いや、まずこっちの問題を！

女 南に行くの。

男・迷子 え？

沈黙。

女 うん、南へ行くの。

男 沖縄？

女 ううん、もっと。

男 オーストラリア？

女 それよりは手前。

男 仕事で？

女 違う。

男 旅行で？

女 違う。

男 もう少し早く行つてよ。そうすれば僕の準備も、

女 あんたと行くんじゃないの。

男 え？

女 あんたの知らない、男の人と、二人で行くの。

迷子 それって。

女 うん、そう。

男 冗談？

女 冗談じゃない。

男 ……。

女 はは、言葉にすると、本当に伝わるね。散々躊躇ったけど、最初からこうすればよかった。

男 僕に、愛想がつきた？

女 それもある、もちろんね。

迷子 あの、えっと。

女 ごめんなさい、こんな話聞かせちゃって。

迷子 あ、いや！ こっちこそ、ごめんなさい。

男 僕が抱えてる、欠点とか、問題点とか、そういうのを解消しても、君は帰ってこない？

女 多分ね。

男 そうか、そっか。

女 言ってくれないんだね。

男 ……。

女 裏切り者って。

男 言つて欲しいの？

女 嘘じゃなかったらね。

男 僕がそう思つたら？

女 うん。嘘はたくさん、養殖の言葉も、もう、たくさん。

男 ……。

女 そっか。思ってくれなかったんだね、残念。だけど、嘘をつかないでくれてありがとう。

男 愛してる。

女 え？

男 過去形じゃなく、現在形で、現在進行形で。

女 ……。

男 うん、ごめんね。言葉足らずは、君だけじゃなくて、僕もそうだったみたいだ。

女 あー、うん、そうか、そっか、そっか……。

男 君のこと、蝶と同じくらい好きだって言ったよね。

女 そだね。ちよっと、いやかなり腹立ったけど。

男 あれは間違い。僕は、君よりも蝶が好きだ。

女 ……。

男 でも僕は、君を蝶より、愛してる。

女 ……ありがとう。

迷子 あの、そのう。

女、ブローチを外し、男に差し出す。
沈黙。

女 ありがとう。

男 ……ありがとう。

迷子 待ったあ！

男がそれを受取ろうとするのを、迷子が止める。

女 なにするんですか！

迷子 やめたほうがいいやめたほうがいいやめたほうがいい。

男 なにを？

迷子 後悔しますって絶対！

女 しないようにこうしてるの、邪魔しないで！

迷子 いや君達はまだまだ若い。私の年は、どうにも思い出せないけど、多分君達よりも

年上だ。年長者として助言しましょう。こういう別れ方は、絶対によくない！ 色々と尾を引くよ？ 特に君！

女 なに？

迷子 彼に黙って他に男を作ってるみたいだけど、その様子じゃ、そっちのほうにいても、また浮気して破局するでしょう、手に取るように分かるぞ！

女 はあ？

迷子 今ならまだ間に合う！ その新しい男にごめんなさいして、この人とよりを戻さない。中々いないよ？ こんなに親切で、優しく、笑顔が素敵な人。そりやまあ、ちよつと変わってるし空気も読めないけど、まあそこは可愛げ、ってことで。

男 あの。

迷子 あなたもあなただ！ もっと力を込めて、

男 僕と彼女で決めたことに、意見しないで貰えますか？

迷子 でも愛してるんでしょ？

男 え？

迷子 彼女を愛しちゃってるんでしょ？

男 それはまあ。

迷子 だったらいかなきゃ！ 自分の魂に素直に従うことが許されるのは、二十代までだ！

女 あんたはなにがしたいの！

迷子 恩人二人への恩返しです！

女 いらないそんなの突き返す！

迷子 その突き返しを馬鹿力で突き返します！ そりやあ！

男 ねえ。やっぱやり直せないかな？

女 はあ？

迷子 いいぞ！

男 この人にそそのかされた訳じゃないけど、ここでこんな形で君と別れちゃうのは、多分後悔するかなって。

女 やめてよ、こんな理想的な形で別れられないよ、この場を逃したら。

男 これからなにがあっても僕らの先には、破局しか待ってない？

女 そうだと思う。

迷子 そんなことないぞ！

男 そんなことないって。

女 そんなことあるの！ こんな部外者の言葉にいちいち揺らされないで。そんなのあたしとあんたのこれまでの時間に対する侮辱だよ。

男 その侮辱を承知で、僕は君とまた二人で歩みたい！

迷子 有効！

女 うっ。

迷子 技あり！

女 太郎うるさい！（迷子を蹴っ飛ばす）

迷子 無効！

男 駄目かな。

女 駄目、だよ。だって、

男 新しい仕事探すよ。君が、カウンセラー向いてないって言うなら。

女 え？

男 家にある蝶の標本も、泣きながらになるけど、全部捨ててもいい。

女 そういうことじゃ、

男 スペースを空ける。実際の部屋のスペースも、僕の心の中のスペースも。

女 駄目、

男 君が見つけた男とも、僕が話をつける。殴り合いになっても、殺し合いになっても、必ず、話をつける。

女 ……。

男 だから僕と、一緒に生きて欲しい。

迷子 決まった！ 一本！ 君の一本勝ちだあ！

男 ちよっと黙ってて下さい！

迷子 あ、はい、すみません。

男 返事を聞かせて、

女、男にキスをする。

迷子 きやつ、人前ですよお。

男と女、見つめ合う。その沈黙。

女 言葉にしくなくても、分かる？

男 うん。

迷子 と、言うことは？

女 キスは。

男 イエスとは限らない。

迷子 え？

女 遅すぎたね。

男 うん、遅すぎた。

女 これ。(蝶のブローチを差し出す)

男 ……。

女 結構、気に入ってたんだ。だから、返すね。

男 持っててくれない？

女 駄目。見る度に、あんたを思い出しちゃうから。

男 そっか、うん……。 (受け取る)

迷子 こ、こんなのって。

男 太郎さん。

迷子 もう一回ちゃんと、

男 ありがとうございます。

迷子 へ？

男 あなたのお陰で、多分今夜は泣くけど、晴れやかな気持ちで、前を向けそうです。

迷子 いや、私はその。

男 今夜は一晚中つきあいますよ、記憶探し！ お巡りさん抜きでね。ちよつとしたお礼です、はは。

迷子 ああ、ありがとうございます。でも、あなたは、あなた達は。

女 あたしは、行きます。なんか、うん、へへ。

男 バイバイ。

女 うん、バイバイ。

迷子 や、やっぱり駄目ですよ！

女 もうおせっかいはいらぬ。これはあたし達の問題。それで、その問題は解決しまし

た。

男 ええ、答えは出ました。ちょっとほろ苦い答えが。

女 だからこの話はここまで。次は、彼があなたの記憶を探す、

迷子 そんなの知るもんか！ 許さない、許さないぞ！

男 それはあなたのエゴですよ。

迷子 目の前で恩人達の破局を見る私の気持ちをちよつとは、

迷子、ものの見事にすつころぶ。

その拍子に、懷からなにかが落ちる。

男 大丈夫ですか？

迷子 私のことはいいんです！ 今はあなた達の。ん？ これは？

迷子、落としたものを拾い上げる。
それはナイフだ。

男 なんですか、それ？

女 ひっ！

男 なに？

女 に、逃げ、逃げ。

男 どうしたの？

女 あいつ！

迷子 陸上部だったんですよ、俺。

沈黙。

迷子 小、中、高、とね。地元では負けなし、地区大会でもベストスリーには入ってた。

まあ、途中でやめちゃいましたけど。でも、その時走った足は、まだここにある。

女 そう、ですか。

男 思い出したんですか？

迷子 ええ、お陰様で。ありがとう御座いました、色々と。ご迷惑おかけしたでしょ？

男 まあ、そうですね、はは。

迷子 ははは。

女 こう、ばんに。

迷子 逃げて下さい。

女 え？

迷子 逃げて下さい。俺はどっちゃかっていうと、追いついて欲しい、っていうよりは、追いかけてたい、ってほうなんです。はは。さあどうぞ、南になり北になり、必ず追いつきますから。

男 そこはなんとかありませんか？

迷子 なりませんね。あ、お兄さんは行っていていいですよ。

男 なんですか？

迷子 男をバラす趣味はないし、お兄さんのこと結構好きなんです。俺がバラすのは、俺をひりだしたアバズレと同じ、股のゆるい女だけだ。

女 ひっ！

男 僕に顔見られてますけど、大丈夫ですか？

迷子 はは、やっぱズレてるな。そんなこと気にしないでいいから、ほら、行った行っただ。

男 でも。

迷子 別れたんでしょ？

男 はい。

女 助、けて。

迷子 だったらこいつは、もう赤の他人だ。

男 そうなりますかね。

迷子 俺はあんたの赤の他人をバラすだけ。

男 はい。

迷子 なにか問題が？

女 お願い。

男 そう言われると、ありませんね。

迷子 でしょ？

男 じゃあ僕は。

迷子 ええ、さようなら。

男 はい、そうですね。

迷子 ほら、逃げないんですか？ 逃げれば少しは助かる可能性ががありますよ？ 多分、二パーセントくらい、はは。

女 やめて、ごめんなさい、謝り、ますから。

迷子 黙れアバズレ、豚のように死ね。

迷子、女を刺し殺そうとする。

男、女と迷子の間に、無意識に、あるいは反射的に割り込む。
ナイフは吸い込まれるように、男に滑り込む。

女・迷子 え？

男 はは、なんでだろ？

迷子は慌ててナイフを引き抜こうとするが、男は迷子の手ごと抑え込み、それを許さない。

女・迷子 なんで？

男 いやあ、赤の他人のために赤い血流すって、なんだか詩的じゃありませんか？

迷子 離、離せ！

男 なんですよ、それは出来ませんね。

女 どうして？

男 行って。

女 え？

男 南へ。あ、いや、現実的には、交番かな？

女 あたしは。

男 君のことなんて知らない。これはきつと、僕がこうしたいから、こうしたんだよ。

女 あ、ああ。

迷子 てめえ、逃げんじゃねえぞ！ 逃げたら生きたままなます切りにしてやる！

男 はは、それは出来ません。僕、この手ははしませんから、なにがあっても。

女 あたし。

男 走って！ ちゃんと前見てね、転ばないように。

女、泣き叫びそうになるのを必死にこらえながら、交番に向かう。

迷子 逃げんな逃げんなって逃げるな！

男 逃げろって最初に言ったのあなたでしょ？

迷子 なんでここまでする！

男 え？

迷子 あいつはあんたを裏切ったんだぞあんたを捨てたんだぞ！

男 そうですね。でも、僕が裏切ったわけじゃない、僕が捨てた訳じゃない。だから、僕の行動はある意味、一貫してるんです。変な話ですけどね、はは。

迷子 いかれてんのかいかれてるないかれてんだろ。

男 あなた程じゃない。僕は蝶を何羽も殺してきたけど、あなたみたいに自分と同種の、人間を殺そうなんて一度も思ったことはない。あ、命を刈り取るって意味では一緒かも。命に軽重がなければね、はは。

迷子 分かったこうしよう。あんたが手を離せば俺はあの女を追いかけない、救急車だっと呼んでやる、パスワードも思い出したしね。だから離せ！

男 悪いんですけどあなたの信用はほとんどゼロなんで、その言葉は信じられないです、ごめんなさい。

迷子 ふざけんな、こんなところで、俺はまだ、まだまだ、もっともつと殺さないと！

男 冷血漢のあなたをそんなに熱くさせるものってなんなんですか？

迷子 離したら教えてやる。

男 なら別にいいです。

迷子 こ、のお！

迷子、渾身の力を込めて、男から離れる。
しかしナイフは男に刺さったままだ。

迷子 くっ、おい！

男 アサギマダラって蝶がいるんです。

迷子 ああ？

男 秋になると、南へ、南へ、飛んでいくんです。子供達を残して。

迷子 いかれたのか？ いや、元々いかれてたか。

男 無責任な蝶でしょ？ いや、ほとんどの昆虫はそうなんですけど、子供達を残して自

分だけ、遠い遠い国に飛んでいく、そんな虫は中々いないんじゃないかな？ だから僕はアサギマダラを捕まえて標本にする時、ちよつと恨みをこめてピンをさすんです。この野郎、よくも僕らを置いていきやがったな、って。

迷子 分かった分かった、お前は頑張ったよ。だからしまいにしてやる。（男に近づく）

男、ゾツとするような速さで自分からナイフを抜き、迷子に突き刺す。

迷子 え？

男 丁度こんな感じで、はは。

迷子 あ、は、かつ。て、てめえ。（全身に力が回らない）

迷子、崩れ落ちる。

男 でも、僕は大好きなんです、あんなに残酷な蝶なのに、アゲハ蝶よりもずっと好きなんです。そう、無責任に、こっちの気持ちも考えず、僕らをおいて、さつさと飛んでいく、あの蝶が、はは。

迷子 ちくしょう、いてえいてえ！ 刺されるのってこんなに痛いのかよお。

男 そりや痛いでしょうね、僕も凄く痛いですから。

迷子 死ぬるか、こんなところで、俺はもっともつと。（ヨロヨロ立ち上がろうとする）

男 駄目ですよ。（もつれるように二人倒れる）

迷子 やめろ、やめろ死にぞこない！

男 それは、あなたもでしょ。

迷子 俺はこんなところじゃ。

男 大丈夫、僕も一緒にいきますから。

迷子 あああああ！（大暴れする）

男 （それを抑えて）そう飛んでいく、南へ、南へ。彼女もそう、きつと……。

蝶が飛ぶ。夜に飛ぶはずのない、蝶が。

男 あ、蝶だ。

迷子 （暴れながら）いやだいやだ！

蝶が飛んでいる。

男 今度は嘘じゃないよ、本当に飛んでる、僕の目の前を、はは。

迷子 (段々力が弱くなる) 死にたくない、こんなところで、俺は殺したかったんだ、死にたかったわけじゃない。

男 ほら見て下さいよ、綺麗な綺麗な蝶ですよ。この世の最後に見るには美しすぎるくらいだ。

蝶が飛んでいる。

迷子 死にたくない死にたくない死にたくない、ちくしょう！ ぶっ殺すぞ！ ちくしょう、ちくしょう……。 (もはや蝶ほどの力も出ない)

男 (その蝶に手を伸ばし) ああ、やっぱり、綺麗ななあ。

男、こと切れる。

その顔はまるで、夢が叶った幼子のように、やわらかく、温かく、安らかだ。蝶が飛んでくる。何羽も、何羽も、数えるのも面倒になるほど。

蝶達は、男の亡骸をすっぽりと包み込む。

迷子は、なにものにも包まれることなく、ただ野ざらしに、そこに晒されている。

迷子 (ヨロヨロと立ち上がり、数歩歩く) いやだ、死にたくないよお、ママ、ママ、僕を捨てたママ。あんたを、ころ、す、まで……。 (虚空に手を伸ばしたまま、こと切れて倒れる)

パトカーのサイレンが聞こえる。
お巡りさん達が、辺りを騒がしくする。
それでもここは、とても静かだ。

幕。